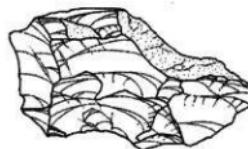




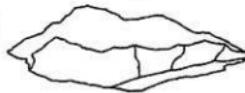
523



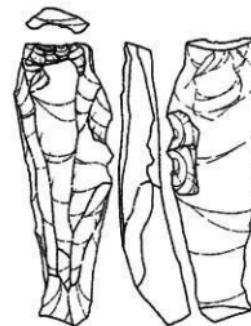
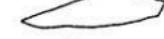
524



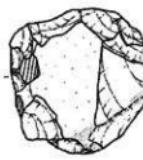
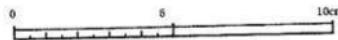
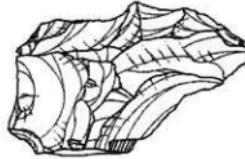
525



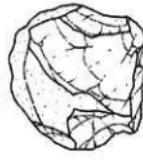
526



527



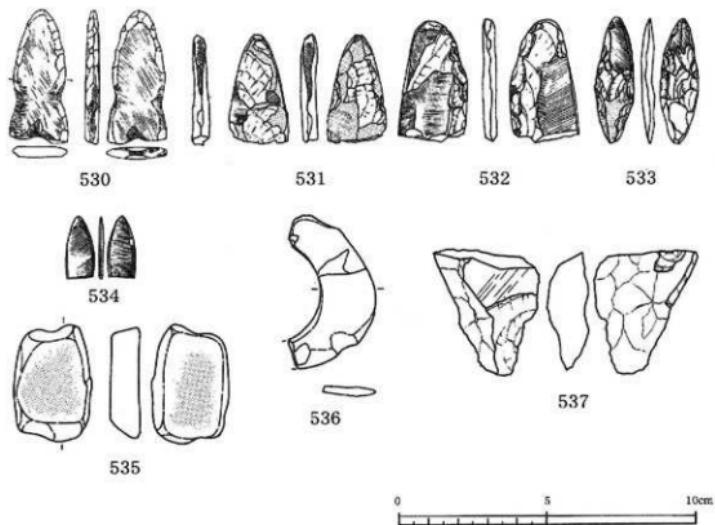
528



529



第54図 出土石器実測図(15)



第55図 出土石器実測図(16)

中央に芯を持つ、比重の大きい円礫である。芯を中心として両面が磨かれており、その外周には、細かな線状の研磨痕が巡る。

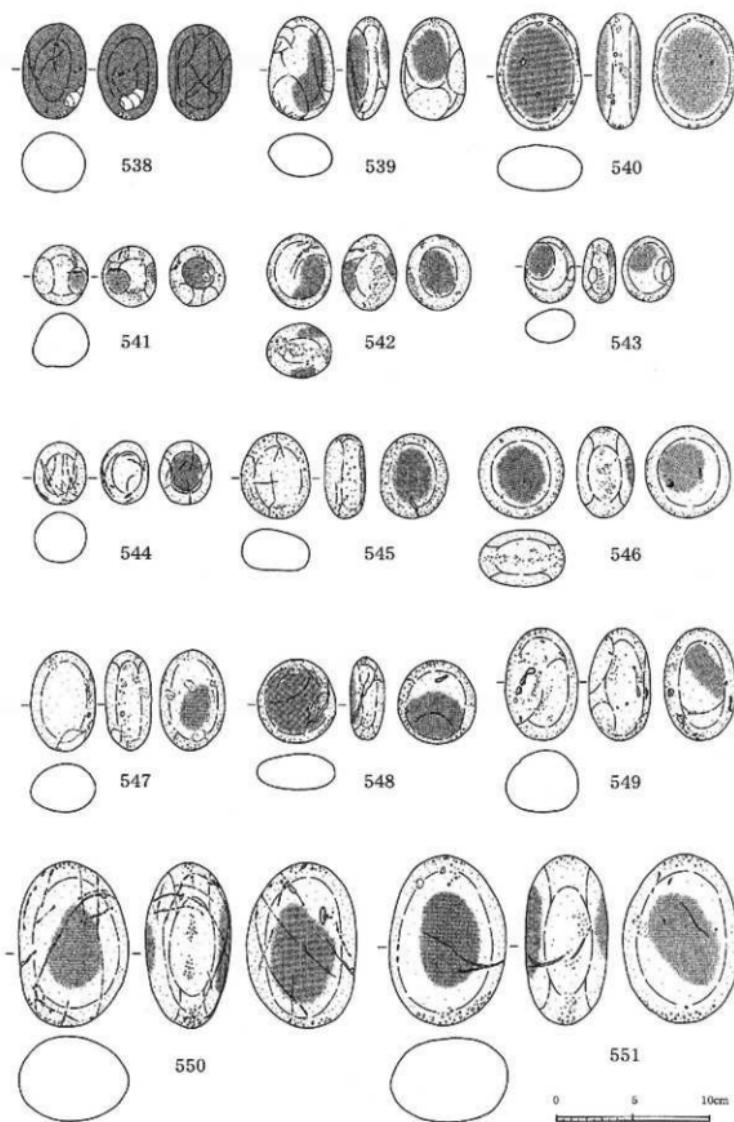
磨石(第56~60図538~579)

100点以上出土した。ここでは、うち42点を掲載した。これらの具体的な観察は表26のとおりである。なお、実測図中にスクリーントーンで示した部分は、研磨痕の認められる部分である。主に砂岩の円礫が用いているが、礫の大きさや形態は様々である。

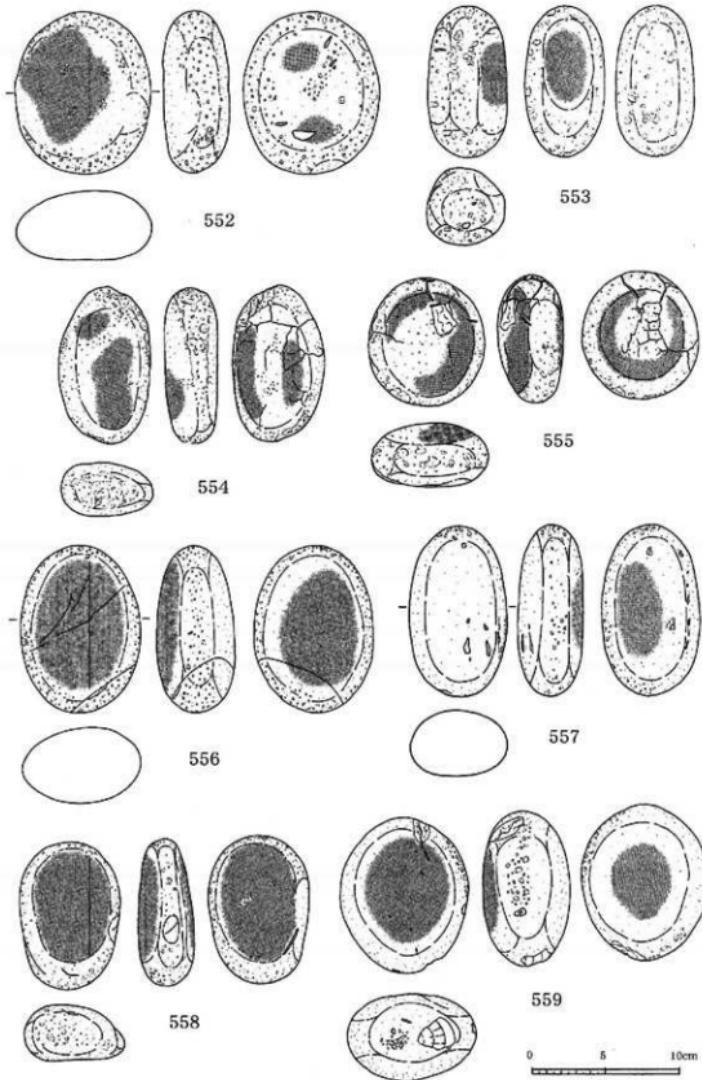
第5節 小結

集石遺構

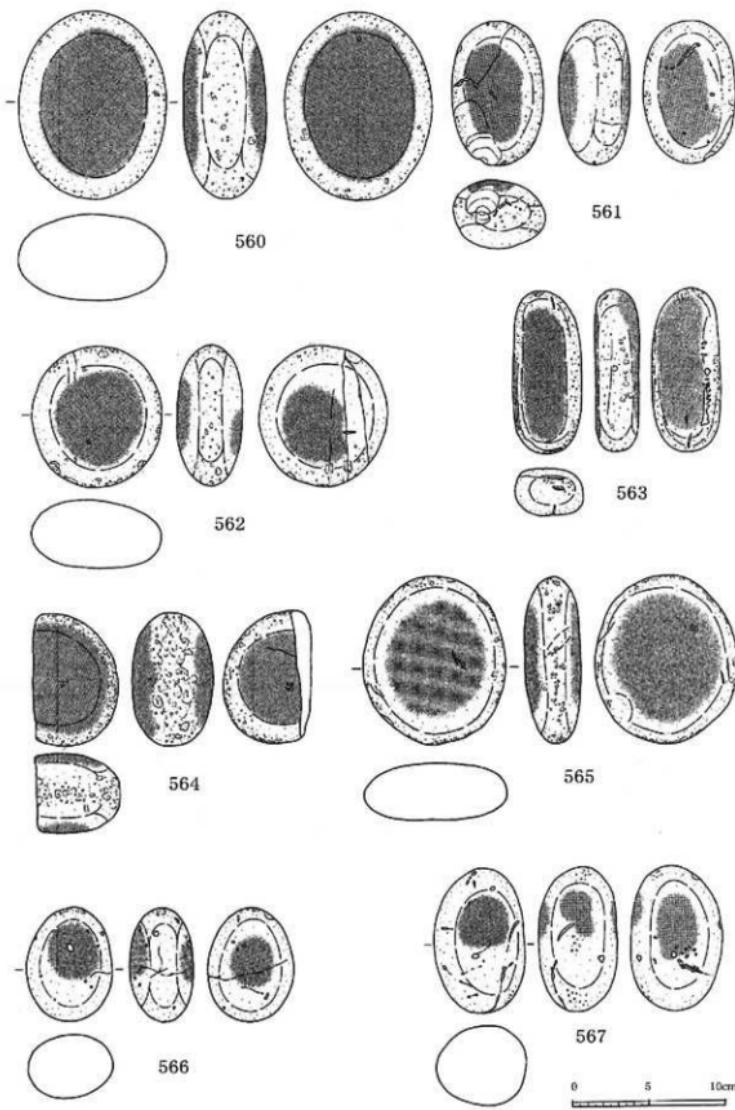
当調査区内からは、底石を置ぐⅢ類や、花弁状配石を持つⅣa類、一部扁平な礫が配されるⅣb類、底面にまで及ぶ配石を行ったⅤ類など、板状の礫や扁平な円礫を遺構に組み合わせたものが多く検出された。この礫は、調査区の東隣を流れる河川沿いの河原において、採集が可能である。検出は、調査区のほぼ全面にわたっていたが、本書で試みた細分を併せてみても、分布に特定の傾向を認めるることはできなかった。構築の時期は、出土土器の割合から、後述する「別府原タイプ」の時期に集中していたと考えられる。なお、集石遺構の構成礫には、研磨



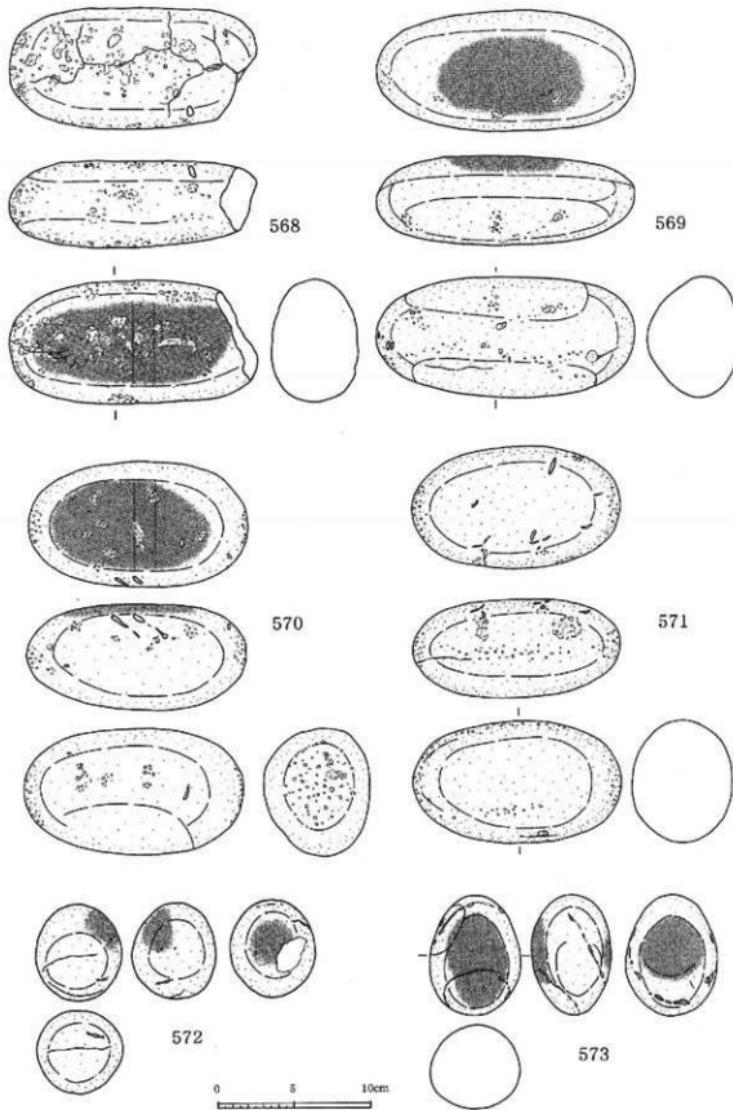
第56図 出土石器実測図(17)



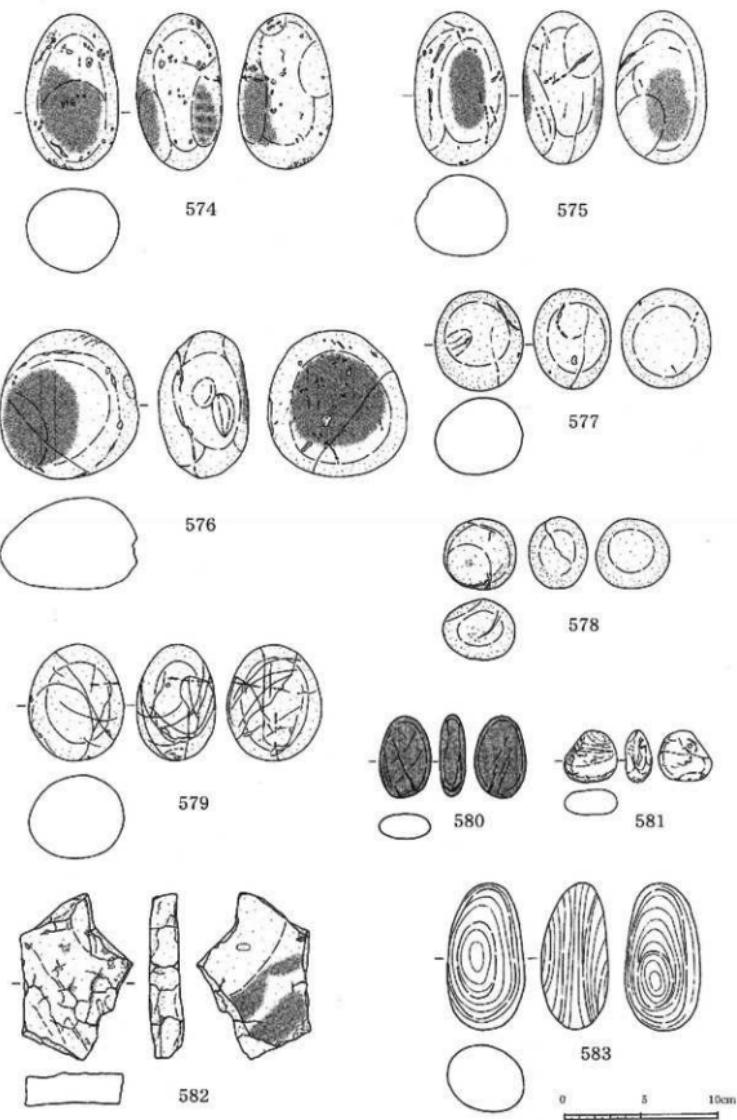
第57図 出土石器実測図(18)



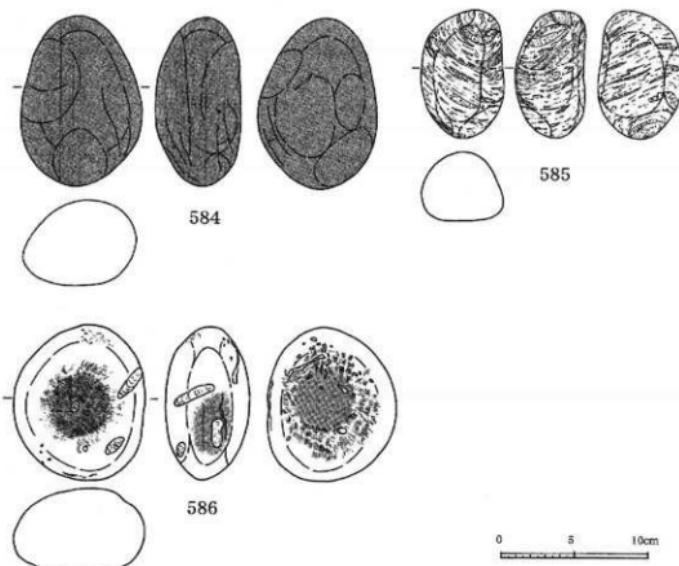
第58図 出土石器実測図(19)



第59図 出土石器実測図(20)



第60図 出土石器実測図(21)



第61図 出土石器実測図(22)

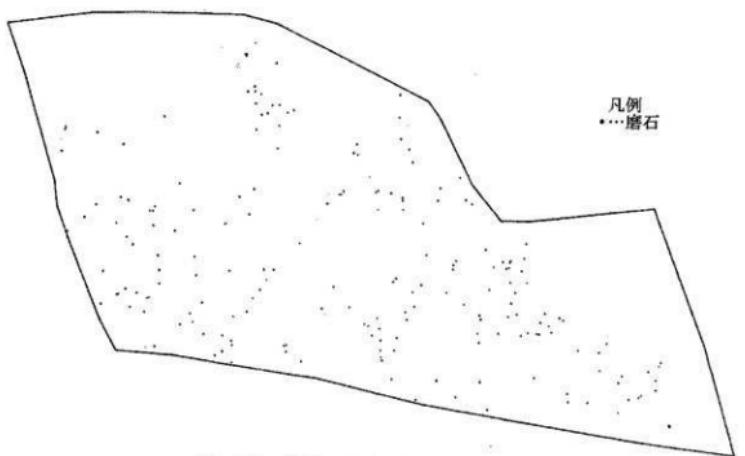
痕を有する礫も認められた。礫と研磨部の観察から、これは破碎した石皿であると思われる。この特徴は隣接するF地区では殆ど認められず、礫を使用する際のサイクルの変化を窺うことができる。

配石遺構

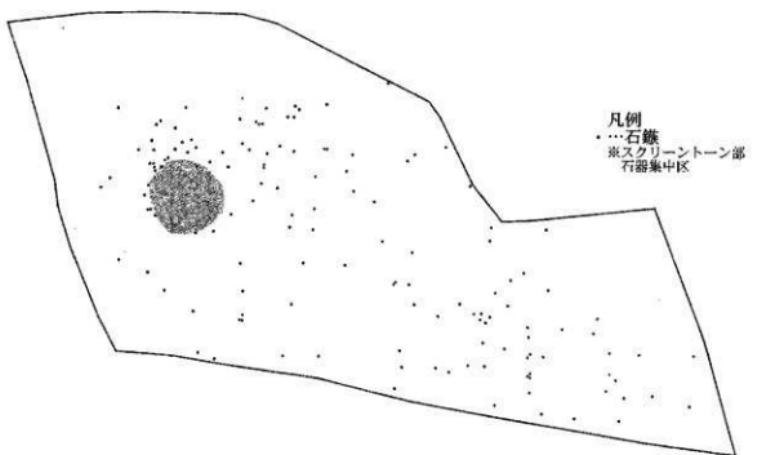
配石遺構のうち、SX-89~92は、浅い掘り込みに、集石遺構でも用いられた扁平な礫を立てたものである。SX-89・90のように、扁平な礫が列状に並んだ状態は、縄文時代草創期の舟形配石炉の一部を思わせるが、覆土から焼土は確認されなかつたうえ、掘り込みは礫の周囲しか行われなかつた。この覆土は、遺構周囲の層と判別が困難であることから、掘り込んだ隙に生じた土を、礫を配した後に直接戻したと思われる。つまり、礫を地表面に立てるために構築されたと考えられるのである。礫表面に認められる赤変は、火の使用を思わせるが、遺跡周辺の河原に転がっている扁平な礫の表面にも、既に赤変が認められるものがあるため、これを人為的と断定することはできない。観察を進めると、赤変は、埋設された礫の下方や裏側にまで及んでいることや、隣接する礫と赤変部が全く異なる場合があることから、礫への加熱は、少なくとも埋設以前に行われたと考えられる。同様の配石遺構は、小林市内屋敷遺跡で検出されている(註2)ほか、時期は異なるが、鹿児島県加世田市椿ノ原遺跡から(註3)も、板状の礫が3個、傾

表26 出土磨石観察表

番号	石材名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	敲打痕	研磨痕
40	砂岩	16.0	5.6	3.8	470	全面に疊ら	両面
41	砂岩	11.1	5.7	4.0	390	周縁	両面
42	砂岩	10.0	6.1	5.0	430	無	両面
43	砂岩	11.0	5.1	4.0	330	両端、片側縁及び両面疊ら	無
44	砂岩	8.9	5.9	4.8	360	周縁及び片面	両面
45	砂岩	15.7	6.9	1.1	310	無	片面
46	砂岩	12.6	8.9	5.8	800	一端	両面
263	砂岩	6.2	4.1	3.9	150	末端	全面
264	砂岩	6.7	4.2	2.7	120	両端及び片側縁	両面
265	砂岩	7.5	5.5	2.9	190	周縁	両面
266	砂岩	3.9	3.6	3.5	80	全面	両面
267	砂岩	5.0	4.1	3.6	110	周縁	両面
268	砂岩	4.3	3.3	2.2	50	周縁	両面
269	砂岩	4.0	3.4	3.1	70	無	片面
270	砂岩	5.5	4.4	2.6	90	周縁	片面
271	砂岩	5.9	5.5	3.7	190	両端及び片側縁	両面
272	砂岩	6.5	4.2	3.0	130	両端及び片側縁	片面
273	尾鈴酸性岩	5.4	5.1	2.2	90	周縁	両面
274	砂岩	7.3	4.7	4.0	210	周縁及び片面	片面
275	砂岩	10.8	7.1	5.5	600	両端及び片側縁	両面
276	砂岩	11.1	7.6	5.4	600	両端及び片側縁	両面
277	砂岩	11.1	9.2	4.4	600	周縁及び両面	両面
278	砂岩	10.2	5.4	5.4	410	全面	片面
279	砂岩	10.5	6.2	3.6	340	周縁及び両面	両面
280	砂岩	8.7	7.9	4.5	400	全面	両面
281	砂岩	11.3	8.1	5.3	600	周縁	両面
282	砂岩	11.6	6.6	4.4	520	両端及び片側縁	片面
283	砂岩	10.0	6.8	3.8	370	周縁	両面
284	砂岩	10.7	8.7	5.9	800	両端及び片側縁	両面
285	尾鈴酸性岩	12.3	9.7	5.4	800	周縁	両面
286	砂岩	9.4	6.0	4.6	400	周縁	両面
287	砂岩	9.2	8.5	4.2	500	両端及び片側縁	両面
288	砂岩	10.6	4.5	2.8	260	周縁	両面
289	砂岩	8.5	5.6	5.2	410	周縁	両面
290	尾鈴酸性岩	11.0	9.3	3.7	500	周縁	両面
291	砂岩	7.4	5.6	4.1	260	尖端	両面
292	砂岩	9.4	5.9	5.1	440	両端及び片側縁	両面
293	砂岩	16.1	8.0	5.6	1000	尖端、片側縁及び両面	片面
294	砂岩	17.0	7.8	5.8	1000	両端及び片面疊ら	片面
295	砂岩	14.4	8.1	6.8	1200	両端及び両面疊ら	片面
296	砂岩	13.7	8.0	6.4	1000	両端及び片側縁	無
297	砂岩	6.3	5.6	5.4	280	無	両面
298	砂岩	7.9	6.0	5.2	350	無	両面
299	砂岩	10.2	6.1	5.5	510	末端	両面
300	砂岩	10.0	6.0	5.3	470	無	両面
301	砂岩	9.7	9.0	5.8	800	無	両面
302	砂岩	6.4	5.7	5.0	270	無	無
303	砂岩	4.6	4.7	3.8	120	一端	無
304	砂岩	7.5	6.2	5.1	360	無	無



第62図 出土石器平面分布図(磨石)



第63図 出土石器平面分布図(石錐)

斜をつけて並べられた状態で検出されている。

七坑列

調査区北部で確認された七坑列は、覆土上に牛のスネロームやアカホヤ火山灰が層状に堆積していることから、調査区内に展開した集落が廃絶した後の、縄文時代早期中～後葉に埋没したと考えられる。地形的に見て、黒北から尾根伝いに上ってきた地点に、尾根に直交するような角度で並んでいることから、陥し穴の可能性も考えられる(註4)。ただし、土坑の底面には逆茂木痕が認められず、深さも陥し穴にしては浅すぎる。更に、覆土上層からは炭化物が検出されているが、この割合は周辺の包含層中よりも多く、埋没過程で火の使用が行われていたとも考えられる。以上の疑問点から、陥し穴としての可能性を指摘するに留め、断定は避けたい。

その他の遺構

SP-87内の出土土器は、胴部片のみであるが、上器内には大ぶりの礫が配されていることから、埋納された可能性が考えられる。鹿児島県上野原遺跡からは、平柄式の壺形土器が埋納された状態で検出されているが、本遺跡の七坑は無文であるため、時期は不明である。円礫が列状に配されたSX-92は、草創期の遺構である、宮崎市塚原遺跡の「石列」に似ているが(註5)、本遺跡の検出例は、礫を配するための掘り込みがなく、長さや礫の大きさを見ても、類例と呼ぶには規模に聞きがある。SX-93は、南九州の縄文時代早期遺跡においてしばしば検出される「磨石集積遺構」に類似するが(註6)、この遺構は「ベット・ストーン」により構成されている。これらの遺構は、日常生活に直接的な関係を示す材料に欠けているため、祭祀的な可能性が高い。

本遺跡は、北側の対岸に立地する椎屋形第2遺跡とほぼ同時期に営まれたと思われるが、椎屋形第2遺跡で20基以上検出されたか穴(連続土坑)は、本遺跡では全く検出されなかった。縄文時代早期の生活面であるⅦ層上面において、周辺よりもやや暗い色調の染みが無数に確認できたが、数ヶ所行った半裁の結果、これらはいずれも層中の斑紋の類であった。なお、船引地区で検出された炉穴は、縄文時代早期の生活面では検出されず、小林降下軽石層の面で初めて確認されている。本遺跡ではⅧ層上面にあたるが、その面まで調査を行えば、炉穴のプランが確認できた可能性も否定できない(註7)。

出土土器

本遺跡から出土した土器は、I類～X I類に分類を行った。

I類の無文土器は、町内では、野崎地区鹿毛第3遺跡や(註8)、前平地区芳ヶ迫第1遺跡(註9)、そして本書で紹介した前ノ原第2遺跡から確認されている。これらは、いずれも詳細な時期は不明であった。しかし、本遺跡でII類とした押型文土器のうち、無文帯の設けられた一群は、出土位置がI類と重なっているほか、薄手で、胎土に纖維の痕跡が認められるなど、I類に共通する特徴が見られる。無文帯を有する押型文土器は、鹿毛第3遺跡と芳ヶ迫第1遺跡でも認められることから、この二つの型式には、時間的なつながりがあると考えられる。ここでは、I類の土器群を、II類に先行もしくは併行する、早期初頭～前葉の時期に位置付けたい。なお、児湯郡川南町霧島遺跡の無文土器も、調整や胎土が酷似する(註10)。報告書では、土器の観察から草創期末から早期初頭に位置付けているが、うち1点の口縁部付近に見られる爪形状の刺突列

(50)に対する評価から、近年、草創期の土器として認識されつつある(註11)。押型文土器が共伴しないため、本遺跡の出土例と同系列にはできないが、今後の資料增加いかんによっては、認識を変える必要が生じよう。

II類のうち、(62~64)の外面には、帯状施文による無文帶が設けられる。この施文は、東九州編年では川原田II式に相当する(註12)。南九州で出土する押型文土器を、東九州編年の中で論じることについては、問題視する指摘もある(註13)が、帯状施文は、古相の押型文土器に行われる典型的な施文手法であるため、編年の位置付けに大幅な変化はないと判断した。(67)には無文帶がないため、やや後出と思われる。なお、近隣に立地するズクノ山第2遺跡F地区で多量に出土した、粗大な押型文を施文した土器(註14)は、本遺跡では確認されなかった。

III類Aである前平式土器の口縁直下には、棒状工具による連点は行われない。

III類Bの石坂式土器は、前追亮一氏の編年に従えば、古段階に位置付けられる(註15)。

IV類の中原式土器は、施文が胴部に及んでいることから、木崎康弘氏の編年ではIV~V式に相当すると思われる(註16)。

V類は、従来は前平式として分類されてきたが、近年独立した型式と認識されつつある(註17)。これまで、町内の縄文時代早期遺跡の多くから出土しており、特に八重地区前畠第2遺跡(註18)では主体的に出土する。町外では、本遺跡の対岸に立地する椎屋形第2遺跡(註19)や、西都市別府原遺跡(註20)において多量に出土する。共伴する十器型式は、椎屋形第2遺跡からは主に加栗山式、別府原遺跡では中原II・III式であることから、早期でも前葉に位置することが予想される。その場合、木崎康弘氏の編年に従えば(註21)、V類はII類と同時期もしくはかなり近かったことになるが、この2つの土器群の関係は、本遺跡では把握できなかった。このV類については、まとまった量が出土した別府原遺跡から「別府原タイプ」と呼称したい(註22)。本遺跡では、口縁直下の貝殻腹縁刺突から4類に細分を行ったが、これらの時間的な関係は不明である。

VI類の桑ノ丸式土器は、ハの字の短沈線を横位に施文したものが数個体確認できるが、F地区の同型式よりも細かい施文が行われている。また、F地区で主体をなす、叉状工具を用いたハの字短沈線や曲線文が出土しない点は特徴といえる。また、V類に比べると、VI~XI類は出土量が激減しており、集落の規模が縮小したことを見ている。

VII類の平柄式土器、IX類の塞ノ神式土器になると、土器片は数個体しか確認されない。

XI類のうち、(171)の口縁部には蒲鉾状の肥厚帯が巡るが、これはえびの市妙見遺跡の出土土器に類似がある(註23)。また、(172・173)は、松の枝を回転施文したものであり、同類のものが、白ヶ野第2・第3遺跡で出土している(註24)。回転施文という施文手法を発展させた、押型文土器の一類と考えられる。

上記のように、本遺跡では、縄文時代早期の幅広い年代の土器が出土しているが、本遺跡の出土土器の大部分は、V類の別府原タイプである。この土器群は、併行関係から早期前葉と考えられ、集落の最盛期もこの時期にあったと考えられる。

石器

出土した250点という点数は、縄文時代早期の遺跡としてはかなり多い部類に入る。しかし、

同時期の別府原遺跡では約700点が確認されていることから、この出土量は、縄文時代早期前葉段階における、宮崎県央部の特徴とも考えられる。

出土した石鎚は、その形態から5つに細分することができた。黒曜石製の石鎚については分類が容易であったが、それ以外の石材は形態が一様でなく、分類が困難であった。また、黒曜石製のものに比べ、それ以外の、特に良質チャート製の石鎚は、抉りの深いもののが多かった。なお、I a類は、南九州の縄文時代早期前葉において主体をなす小型正三角形鎚(註25)であるが、これは別府原遺跡からも多く出土しているほか(註26)、やはり別府原タイプを主体とする本町の元野地区高野原遺跡(E～G区)でも25点出土している(註27)など、宮崎県央部においても頗る在化した状況を見ることができる。一方、II a類は、高野原遺跡では全く出土せず、別府原遺跡出土の縦長石鎚は、本遺跡のものよりも抉りが深い。縦長で抉りの浅い石鎚としては、草創期の帖地型石鎚Aタイプがあるが(註28)、II a類の最大幅は基部に統一されており、形状が異なる。

本遺跡と、ズクノ山第2遺跡F地区的黒曜石製石鎚は、次の地点が原石採集地と考えられる(註29)。

A類：桑ノ木津留及びその周辺

B類：姫島

C類：針尾島及びその周辺

D類：多久及びその周辺

E類：上牛鼻及びその周辺

F類：不明

このなかで、E地区で確認できた黒曜石の大半はA類であり、石鎚全体の4分の3を占める。次いでB・E・F類が数点であった。なお、F地区で確認されたC・D類は、本遺跡からは出土しなかった。これは、集落が営まれた時期における黒曜石の交易圏が、西北九州まで達していないかったためと考えられる。

他の石材としては、良質チャートの割合が高い。この石材と赤色チャートは、丁寧な調製が行われるものが多い。一方、粗悪なチャートは、粗い調製が多くなる。

石鎚の分布状況については、第63図の平面分布図に示したとおりであるが、出土位置不明の多くは、後述する剥片の集中部から出土していることから、剥片剥離作業の目的が、石鎚の製作であったことを示している。

石斧

残存する刃部幅に着目すると、柄の部分よりも広いもの(467・468)、同程度のもの(466・469・470・476)、狭いもの(471～473)に細分できる。このうち、幅の狭いものについては、木材の伐採よりも加工に適しており、集落内で木材の加工が行われたことを示している。この他にも、長軸方向に対し刃部が傾斜するもの(474)もあり、多様な石斧の利用状況を窺い知ることができる。

磨石

100点を超える点数が出土した。これは、縄文時代を通して出土量の多い早期の遺跡の中でも

多い部類に属する。うち大半は、研磨痕・敲打痕が明確に認められる。第62図を見ると、調査区のほぼ全面から出土していることが分かる。

剥片

本調査区からは、膨大な量の剥片が出土した。最も多かったのは黒曜石であり、総重量は8.4kg、総点数は数千点に上る。この多くは、石器でも大半を占めたA類である。親指大の小礫から剥離されたものであり、大きさの制約から、石器の製作する途上に生じたものと考えられる。次いで多かったのは粗悪なチャートであり、重量にして5.2kgになる。この石材は、ズクノ山第2遺跡F地区の立地する丘陵の露頭で見られ、拳大の礫を持ち込んだと思われる。人手が容易であるにも関わらず、出土する剥片に、細かい調整が殆ど行われないのは、この石材が石器製作に適さなかったためと思われる。他に、調査区内から出土した剥片類は、ホルンフェルス(1.2kg)、良質チャート(0.2kg)、赤色チャート(0.2kg)がある。剥片類は、第63図にスクリーントーンで示した部分に集中して出土したことから、この地点は、石器製作場であったと思われる。この周囲に集石造構が作られなかつたことは、集落における「場の機能」を考察する上で興味深い。

用途不明石器

(530)のトロトロ石器は、木崎康弘氏の分類に従えば^(註30)石器形に含まれる。この石器は、押型文土器と深い関係があることが知られているが、本遺跡でⅡ類とした、帯状施文の押型文土器に伴うとすれば、トロトロ石器の中でもかなり古い時期に製作されたことになる。また、(531～534)は、形状は異なるものの、同様の擦痕が器面に残されていることから、未製品もしくは類似品であると考えられる。なお、近隣のF地区からも1点出土しているが、こちらはチャートを著しく磨いた羊頭形である。この石器については、道具としての直接的な利用ではなく、祭祀行為に伴うと推定されている。

(586)の石材は、鹿毛第3遺跡^(註31)、元野河内遺跡^(註32)、永迫第2遺跡^(註33)、高野原遺跡^(註34)、宮田遺跡^(註35)・井手ノ尾遺跡^(註36)でも確認されている。また、前畠第1遺跡から出土した石製品^(註37)も、この石材を加工したものである。『田野町史』によると^(註38)、これは、水石愛好家に「鉄丸石」と呼ばれる石材であり、原産地について「田野で特に多いのは持田渓谷と天神谷」と記された上で、その成因について、「鉄分の多い团塊ではなかろうか」と仮定されている^(註39)。上記の遺跡からは、縄文時代早期の包含層から出土していることから、同時期における定形的な石器の一つだったようである。なお、上野原遺跡で出土したペット・ストーンの中にも、この石材が含まれることから^(註40)、その分布範囲は、田野盆地外にまで及んでいたようである。これらは、大きさや加工の度合いにばらつきがあり、用途については、今後の検討が必要である。ちなみに、畠田遺跡の縄文後・晩期包含層^(註41)や、本野原遺跡の縄文後期窪穴住居内からも確認されていることから、縄文時代早期以降においても、たびたび石器として用いられたようである。

以上のように、本遺跡は、主に縄文早期前葉に営まれた集落跡であり、集落の構成員は、多量の石器を製作し、磨石を用いて植物質食料を加工し、集石造構で調理する生活を営む傍ら、

配石遺構やピットを構築し、トロトロ石器を製作するなど、精神的な文化も発展させていたと考えられる。

(註)

- 1：熊本県教育委員会 1995「無田原遺跡」『熊本県文化財調査報告書』148集
- 2：宮崎県埋蔵文化財センター 1999「内屋敷遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第14集の、配右1号～3号のことである。
- 3：加世田市教育委員会 1998「柏ノ原遺跡 第1分冊」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(15)
の、4号配石炉のことである。
- 4：高橋信武 1994「九州の階層穴の変遷」『先史学・考古学論究』龍田考古学会
- 5：宮崎県埋蔵文化財センター 2001「松元遺跡 井手口遺跡 球原遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第44集
- 6：鹿児島県埋蔵文化財センター 2001「上野原遺跡(第10地点) 第2分冊」
『国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 7：伊東 健氏のご教示による。
- 8：田野町教育委員会 1998「鹿毛第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第28集の、15番と50番のことである。
- 9：田野町教育委員会 1986「芳ヶ迫第1遺跡 芳ヶ迫第2遺跡 芳ヶ迫第3遺跡 札ノ元遺跡」
『田野町文化財調査報告書』第3集の、第3章100～106番のことである。
- 10：宮崎県埋蔵文化財センター 1997「綿島遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第4集の、50～59番のことである。
- 11：宮崎縄文研究会 1997「宮崎県内における縄文時代窓創期の遺物集成」『宮崎縄文研究会資料集』1
九州旧石器文化研究会 2000「九州の縄石器文化」『第25回九州旧石器文化研究会資料集』
- 12：遠部 慎 1998「川原田式土器小考」『おおいた考古』第9・10集
- 13：岩永哲夫 1988「九州東南部における縄文早期遺跡の概観 出出土器を中心にして」
『宮崎県総合博物館研究紀要』13
- 14：田野町教育委員会 2002「ズケノ山第2遺跡F地区」『田野町文化財調査報告書』第43集の、61～176番のことである。
- 15：前追亮一 1993「舟塚B遺跡の再検討」『南九州縄文通信』No.7
- 16：熊本県教育委員会 1996「蒲生・上の原遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第158集
- 17：黒川忠広 2000「南九州貝殻文系土器研究の現状と課題」『大河』第7号
- 18：田野町教育委員会 1994「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集の、第IV章1～36番のことである。
- 19：宮崎市教育委員会 1996「椎屋形第1遺跡 椎屋形第2遺跡 上の原遺跡」の、第Ⅲ章1～16番のことである。
- 20：宮崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡 西ヶ辻遺跡 別府原第2遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第61集の、I類及びII類のことである。
- 21：註(16)文献中の、第7表のことである。
- 22：田野町教育委員会では、これまで、この土器群を「貝殻条文土器」と呼称してきた。しかし、縄文時代早期～中期の南九州系土器は、「貝殻文系土器」と総称されており、名称が混乱する恐れがあることから、あえてこの名称

を用いることにした。なお、ここでは定義付けをした上での設定ではなく、あくまで便宜上の名称であるため、型式ではなく「タイプ」とした。

- 23：宮崎県教育委員会 1994「野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡」
『九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書』第2集の、第IV章97番のことである。
- 24：宮崎県埋蔵文化財センター 2002「白ヶ野第2・第3遺跡 上の原第1遺跡(B地区)」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第62集の、B3類・4類上器のことである。
- 25：馬籠充道 2002「桑ノ木津留産黒曜石と縄文時代早期の小型石器について」
『石器原産地研究会 第2回研究集会』発表資料
- 26：報告された中では、206～222番がそれにあたる。
- 27：田野町教育委員会 2000「高野原遺跡(E-G区)」『田野町文化財調査報告書』第36集の、64～88番のことである。
- 28：簗田洋昭 1999「粘地遺跡における粘地型石器について」『第6回 企画展示「ドキどき縄文さしがけ展」岡院』
- 29：肉眼観察によるものであり、蛍光X線等の理化学的手法を経ていないため、正確性には欠ける。
- 30：熊本県教育委員会 1995「無田原遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第148集 第229図
- 31：(註8)文献中の、199・200番のことである。
- 32：田野町教育委員会 2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』第39集の、362・369～371番のことである。
- 33：田野町教育委員会 1996「永波第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第21集の、119番のことである。
- 34：(註23)文献中の、131・132番のことである。
- 35：(註18)文献中の、第73図33番のことである。
- 36：田野町教育委員会「井手ノ尾遺跡」『田野町文化財調査報告書』第14集の、238・239番のことである。
- 37：(註18)文献中の、第18図155番のことである。
- 38：田野町史編纂委員会 1983『田野町史 下巻』田野町
- 39：鹿児島県埋蔵文化財センター 2001「上野原遺跡(第10地点) 第8分冊」
『国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)』
の、第217図7番のことである。なお、この報告書で「直鉛」とされた、第179図の1・3番は、本文ではホルンフェルスの円錐とされているが、実物を観察すると、これも加工を行った鉄丸石であるような印象を受ける。穿孔の方法は不明とされているが、鉄丸石の中には、中心部の芯が空洞化したものもあり、前畠第1遺跡の出土例に見られる末貫通の穿孔は、加工ではなく自然に空いていたものであった。上野原遺跡出土例も、これと同様である可能性を考えられよう。
- 40：なお、鹿毛第3遺跡の出土例を、現宮崎県総合博物館学芸課課長である青山尚友氏に鑑定して頂いたところ、「貝の化石の一種」との回答があった。
- 41：田野町教育委員会「畠田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第40集の、7番のことである。



礫群01 検出状況



礫群02 検出状況



礫群03 検出状況



礫群04 検出状況



礫群05 検出状況



礫群06 検出状況



石群07 検出状況



石群08 検出状況



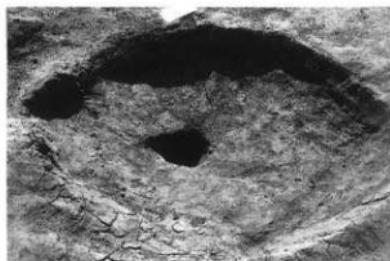
SI-09 検出状況



SI-10 検出状況



SI-11 検出状況



SI-11 完掘状況

図版
3



SI-12 検出状況



SI-12 検出状況



SI-12 配石検出状況



SI-12 土層断面



SI-13 検出状況



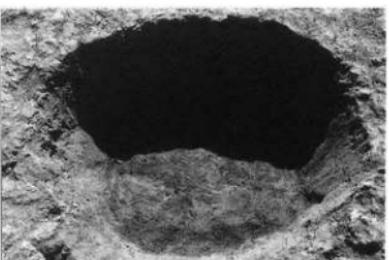
SI-13 完掘状況



SI-14 検出状況



SI-15 検出状況



SI-15 完掘状況

図版
5



SI-16 検出状況



SI-16 完掘状況



SI-17 検出状況



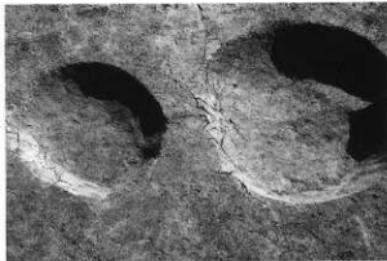
SI-17 検出状況



SI-17 完掘状況



SI-18・19 検出状況



SI-18・19 完掘状況



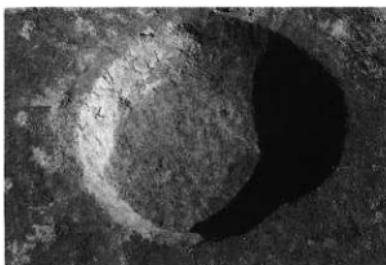
SI-20 検出状況



SI-20 完掘状況



SI-21 検出状況



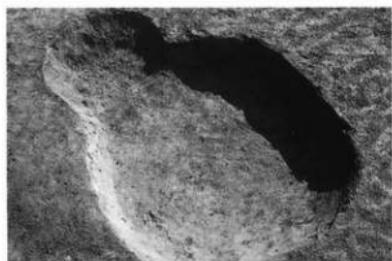
SI-21 完掘状況



SI-22 検出状況



SI-23 検出状況



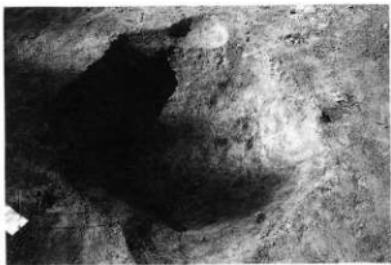
SI-23 完掘状況



SI-24 検出状況



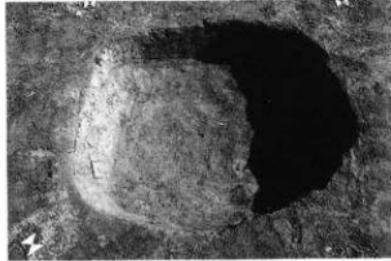
SI-25 検出状況



SI-25 完掘状況



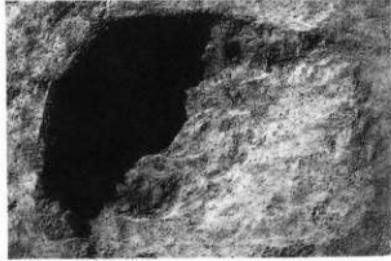
SI-26 検出状況



SI-26 完掘状況



SI-27 検出状況



SI-27 完掘状況



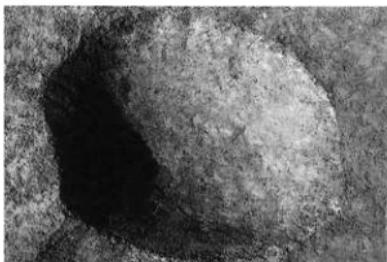
SI-28 検出状況



SI-28 完掘状況



SI-29 検出状況



SI-29 完掘状況



SI-30 検出状況



SI-30 完掘状況



SI-31 検出状況



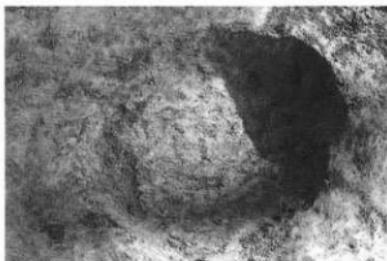
SI-31 完掘状況



SI-32 完掘状況



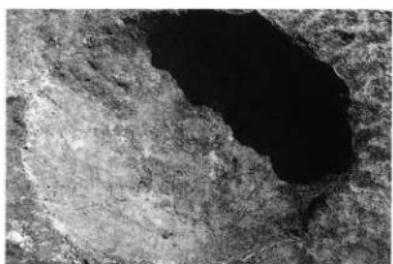
SI-33 検出状況



SI-33 完掘状況



SI-34 検出状況



SI-34 完掘状況



SI-36 検出状況



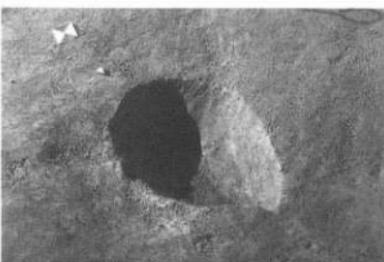
SI-36 完掘状況



SI-37 検出状況



SI-38 検出状況



SI-38 完掘状況



SI-39 检出状况



SI-39 完掘状况



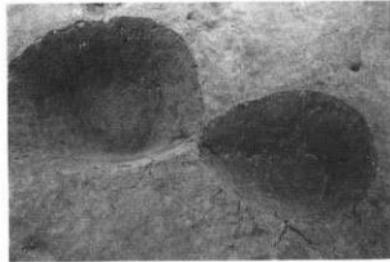
SI-41 检出状况



SI-41 完掘状况



SI-42 检出状况

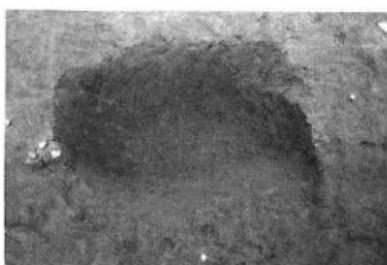


SI-42 完掘状况

図版
13



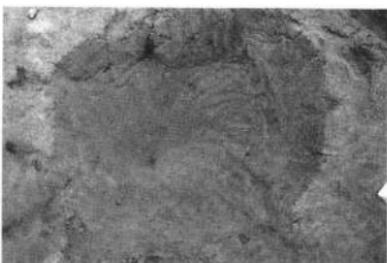
SI-43 検出状況



SI-43 完掘状況



SI-44 検出状況



SI-44 完掘状況



SI-42~44 完掘状況



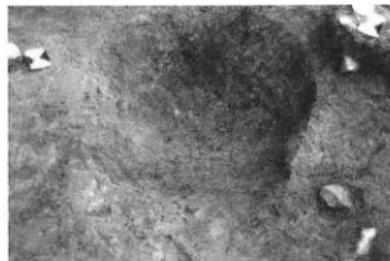
SI-45 検出状況



SI-45周辺 検出状況



SI-45 完掘状況



SI-46 完掘状況



SI-61 検出状況



SI-61 配石検出状況

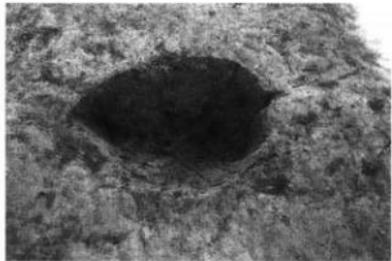


SI-61 配石検出状況

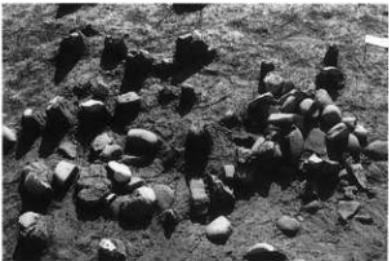
図版
15



SI-61 配石検出状況



SI-61 完掘状況



SI-48 検出状況



SI-48 完掘状況



SI-49 検出状況



SI-49 検出状況



SI-49 完掘状況



SI-50 検出状況



SI-50 土層断面状況



SI-50 完掘状況



SI-51 検出状況



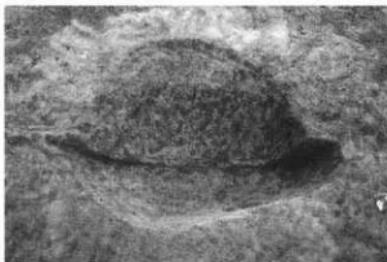
SI-51 土層断面



SI-51 完掘状況



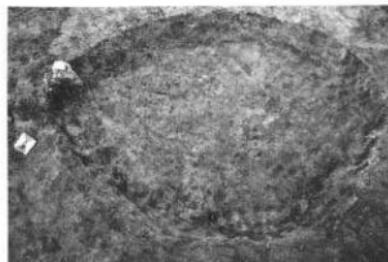
SI-52 検出状況



SI-52 完掘状況



SI-53 検出状況



SI-53 完掘状況



SI-54 完掘状況



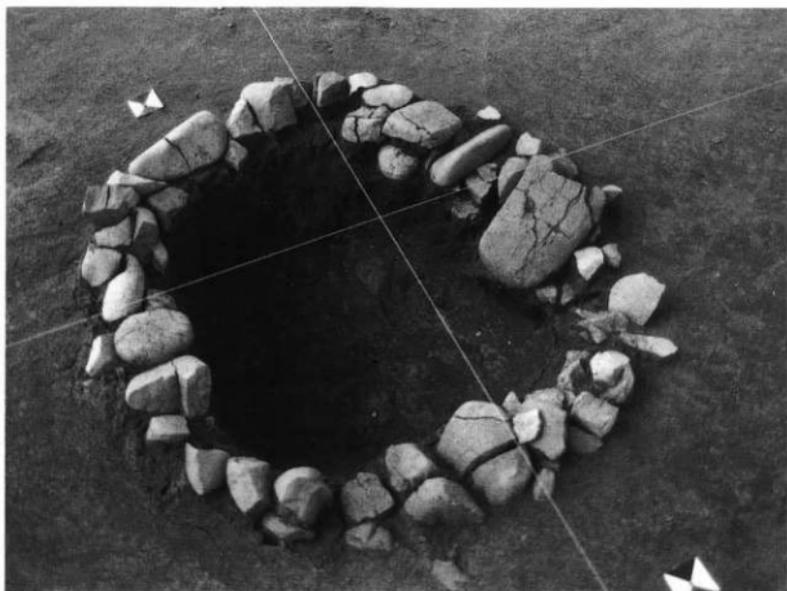
SI-55周辺 検出状況



SI-55 検出状況



SI-55 配石検出状況



SI-55 配石検出状況



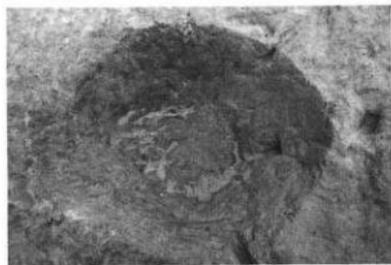
SI-56 完掘状況



SI-57 検出状況



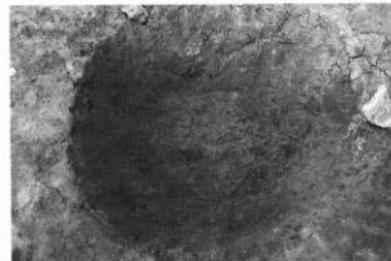
SI-57 完掘状況



SI-58 完掘状況



SI-59 完掘状況



SI-60 完掘状況



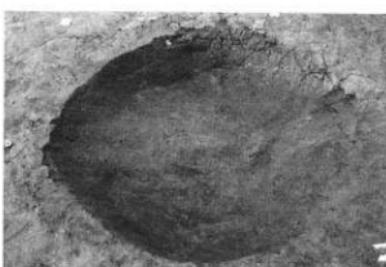
SI-47 検出状況



SI-47 完掘状況



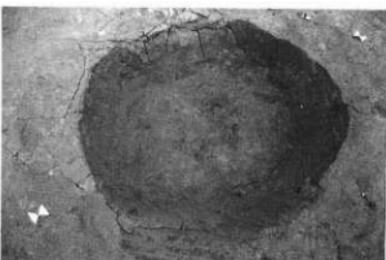
SI-62 検出状況



SI-62 完掘状況



SI-63 検出状況



SI-63 完掘状況



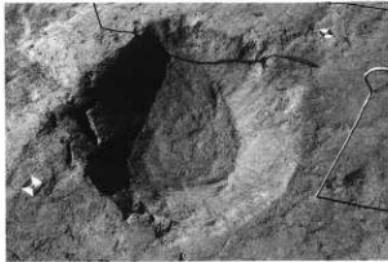
SI-64 検出状況



SI-64 完掘状況



SI-65 檢出状況



SI-65 完掘状況



SI-66 檢出状況



SI-66 配石検出状況



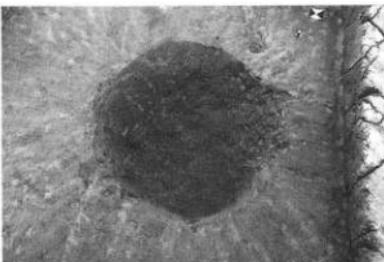
SI-66 完掘状況



SI-67 檢出状況



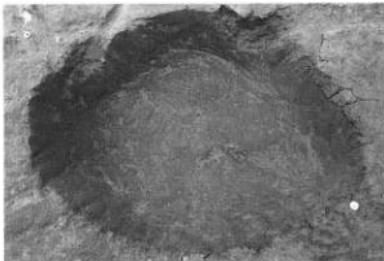
SI-67 検出状況



SI-67 完掘状況



SI-68 検出状況



SI-68 完掘状況



SI-69 検出状況



SI-69 完掘状況



SI-70 検出状況



SI-70 検出状況



SI-70 検出状況

図版
25



SI-70 配石検出状況



SI-70 配石検出状況



SI-70 配石検出状況



SI-71 検出状況



SI-72 検出状況



SI-73 検出状況



SI-74 検出状況



SI-74 配石検出状況



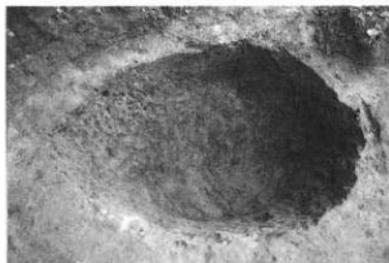
集石遺構検出作業



集石造構剥ぎ取り作業



土坑列(SC76~81)検出状況



SC-76 完掘状況



SC-77 完掘状況



SC-78 半掘状況



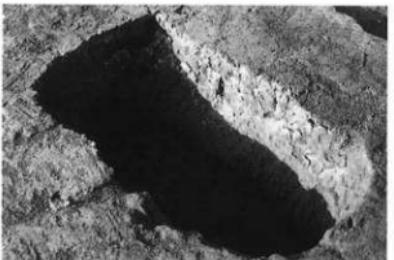
SC-78 完掘状況



SC-79 完掘状況



SC-80 完掘状況



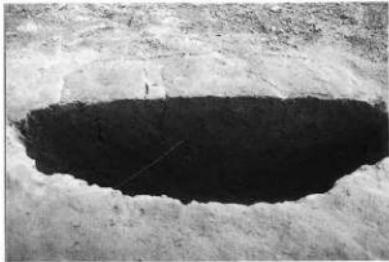
SC-81 完掘状況



SC-82 完掘状況



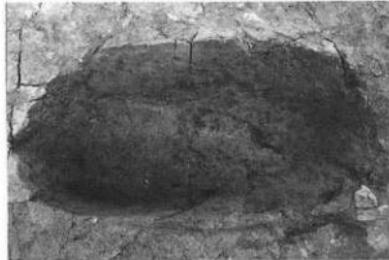
SC-83 検出状況



SC-84 土層断面



SC-84 完掘状況



SC-85 完掘状況



SC-86 完掘状況



SP-87 検出状況

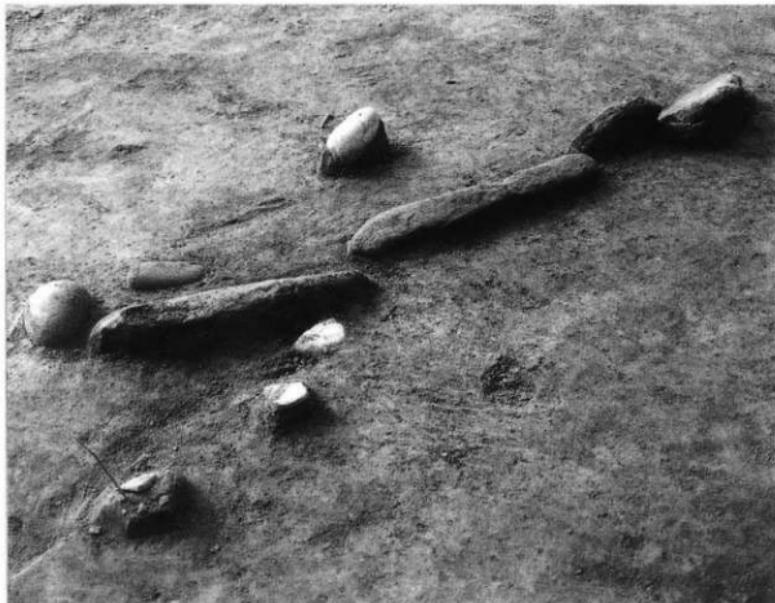
図版
31



SP-87 土層断面



SP-87 土層断面



SX-88 検出状況



SX-88 検出状況



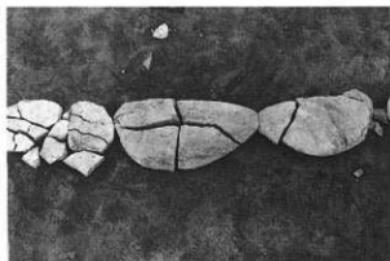
SX-88 検出状況



SX-88 完掘状況



SX-88 完掘状況



SX-88の構成礫



SX-89 検出状況



SX-89 検出状況



SX-89 検出状況



SX-89 完掘状況